

令和元年6月11日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04129

研究課題名(和文) 学校現場でのセクシュアル・マイノリティへの効果的な心理的支援とアジア諸国との比較

研究課題名(英文) Psychological Support for LGBTQ+ Students and Comparison among Asian Countries

研究代表者

葛西 真記子 (Kasai, Makiko)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：70294733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、第一に、学校教員の意識変容・理解促進を目指したマニュアルを作成し、その効果を検証することであった。2006年に作成したプログラムを基に、新たにプログラムを開発し、それを基に、教員対象のリーフレットや教員やカウンセラー対象のハンドブックを作成した。第二に、日本以外のアジアの国々におけるLGBTQ+の現状について明らかにし、LGBTQ+に対する偏見・差別が各国でどのような文化的意味・役割を持つのかを明らかにすることであった。アジア諸国に関しては、韓国・台湾におけるLGBTQ+の現状について専門家や当事者にインタビューを行い、歴史的背景、現状、同性婚への対応等について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

セクシュアル・マイノリティに関する研究に関しては、性的指向や性別違和に気づき始め悩み始める思春期に大半の時間を過ごす学校現場の教職員への情報提供、支援方法などは、本研究代表者が行っているもの以外、存在しなかった。そのため、教職員のLGBTQに関する啓発的訓練の方法を開発することは、教育分野において独創的で意義のあるものであった。また、日本やアジア諸国のLGBTQに関する現状・問題を国際社会に発信することは、西欧の性に対する考え方・見方をそのまま取り入れるのではなく、文化に根差した国際的な研究を発展させることが可能となった。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this project were 1) developing an effective program for teachers and counselors to support LGBTQ+ students and evaluating its effectiveness, and 2) investigating current issues and facing problems for LGBTQ+ in Asian countries. We developed a new program for teachers and counselors based on "LGB Sensitive and Affirmative Counselor Training Program" (Kasai & Okahashi, 2011; Kasai, 2010). First, we developed a program including Transgender and Queer (Odo & Kasai, 2017) and a program for preschool teachers (Motoki & Kasai, 2019). We also made a leaflet and handbook explaining LGBTQ+ issues and how to support students at each school. We interviewed several professionals and LGBTQ+ individuals in Korea and Taiwan asking historical background, present issues, and same-sex marriage.

研究分野：臨床心理学

キーワード：セクシュアルマイノリティ LGBTQ 性の多様性 学校教育 心理的支援 地域支援 児童生徒 カウンセラー

## 1. 研究開始当初の背景

同性愛・性同一性障害等のセクシュアル・マイノリティ（LGBTQ）に関して、平成14年3月の閣議決定では、取り組むべき人権課題その他の課題（12）に含まれ、法務省・文部科学省が発行した人権教育・啓発白書において、「性同一性障害者の人権」、「性的指向（異性愛・同性愛・両性愛）を理由とする偏見・差別をなくし、理解を深めるための啓発活動」についていくつかの取り組みが報告されている。また、平成22年には文部科学省から都道府県の教育委員会へ性同一性障害の生徒について本人の心情に配慮した対応をとるの通知がなされ、平成25年の文部科学省が行った「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」では、全国から606件の報告があった。これは、これまでの様々な調査結果（電通ダイバーシティラボ，2012）からLGBTの割合である5%という数字と比べてもかなり少数であり、未だ対応できていない事例が多く存在することが推測できる。平成17年度に厚生労働省が行った調査によると、学校教育での同性愛についての取り扱いでは、「一切習っていない」「異常なもの」「否定的な情報」を合わせると93.1%になっており、これは、平成25年に行われた調査（日高，2013）においてもほとんど変わらなかった。また、教員がどの程度LGBTについて授業で取り入れたかどうかについての調査（日高，2013）では、77.5%の教員が取り入れておらず、その理由は、「教える必要性を感じなかった」「同性愛・性同一性障害についてよく知らない」が7割であった。このような学校現場において、LGBTの児童生徒は自身の性的指向を肯定的に受け入れることは困難であり、かつ偏見や嫌悪を持つようになり、それは、内的同性愛嫌悪へつながり、自分自身への否定的な自己イメージ、自信の欠如、自尊心の低下にもつながってくるだろう。自殺未遂率は異性愛とLGBを比較すると5.98倍になっており（日高ら，2008）、LGBTをネタとした冗談やからかいを見聞きした児童生徒は84%にのぼり、いじめられた経験も65%であった（いのちリスペクト，2013）。

このような現状の中、研究代表者は、挑戦的萌芽研究（平成18年～21年度）において「セクシュアル・マイノリティへの心理的支援に関する研究」を行った。その中で明らかとなったことは、LGBTの青少年が自らの性自認、性的指向について悩んだときに、身近に相談できる人が存在しておらず、モデルとなるLGBTの大人が存在しなかったことが多いという現状であった。また、セクシュアル・マイノリティへの心理的支援プログラムを考案し、LGB-Knowledge, and Attitudes Scale for Heterosexuals (LGB-KASH：異性愛者のLGBに関する知識・態度尺度)の日本版を開発（Kasai & Okahashi, 2008；葛西・岡橋,2010）し、日本における「LGB センシティブカウンセラー養成プログラム」の実践とその効果検証を行った（葛西・岡橋，2009；葛西，2010；葛西，2014）。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、学校教員の意識変容・理解促進を目指したマニュアルを作成することである。それを用いて、教員自身の異性愛主義的価値観の変容をはかり、社会的

偏見・差別が日常場面に影響しているということを認識できるように支援する。また、性的指向の問題と性自認の問題の区別ができていない教員が多いため、その区別についても明確な説明ができるようなモデルを作成する。また、性同一性障害と自閉症スペクトラムの類似・混同が指摘されている（針間，2014；佐々木，2014）ので、その問題点を明確にする。

第二に、日本以外のアジアの国々におけるLGBTQの現状について明らかにし、LGBTQに対する偏見・差別が各国でどのような文化的意味・役割を持つのかを明らかにし、西欧を含めた国際社会に発信することを目的とする。

### 3．研究の方法

第一の目的である小中高等学校教員のLGBTQ理解を促進し、適切な心理的援助が行えるようなマニュアル作成に関しては、まず、葛西・岡橋（2011）が作成したカウンセラー用の訓練プログラムを教員用に改訂したもの（LGBT センシティブ支援者訓練プログラム）を2014年に教員を対象に、実践した研究をもとに、その結果から教員に見られやすい問題点 性的指向と性自認の混同、問題点 発達障がいの子童生徒が持つ性別違和感と性同一性障害を持つ児童性の性別違和感の違いについて、様々な学校現場の事例をもとに明らかにする。オランダの調査では、性同一性障害の外来患者の7.8%が自閉症スペクトラム障害の診断が可能であったと報告されており（館農・池田・斎藤，2005）日本でも杉山（2005）は、高機能自閉症において、同一性の混乱から、性同一性の障害へ発展することもあると指摘している。これらの症例を参考に、学校現場での架空の事例を使用して、教員への質問紙やインタビュー調査を行う。アンケートの結果を分析し、問題の性的指向と性自認の混同には、異性愛主義の考え方があること、つまり、「男性が男性を好きなのではなくて、女性の心を持っているから男性が好きなのだ」という考え方に陥っているという点について、どのような説明モデルが最適であるかを考察し、訓練方法を考案する。問題の発達障がいをもつ児童生徒に特有の自分自身への違和感や、対人関係のむずかしさから、性別違和感を持っている場合と、発達障がいを伴わず、性別違和感を持つ児童生徒の心理的違いを明らかにし、説明方法を考案する。

これらの調査結果をもとに、教員への説明モデルを構築し、その実践を中学校・高等学校を中心に行う。日高（2013）の調査では、教員が授業でLGBTを取り上げなかった理由が「教える必要性を感じなかった」「同性愛・性同一性障害についてよく知らない」が7割以上であったことから、学校の教員がLGBTについて教えないことによる悪影響について、「セクシュアリティによるいじめの現状」「いじめの深刻化、複数学年継続していること」「誰にも相談できないことによる心理的影響」「自殺企図・未遂率の高さ」など（いのちリスペクト，2013）の結果も取り入れたマニュアルを作成する。次に、同性愛・性同一性障害の知識を獲得してもらうために、性の4側面からの説明モデル・グラデーションモデル等を使用し、より理解が得られるものをマニュアルに取り入れる。教員への実際のな

説明を実践し、その効果を検証しながら、効果のあるものをマニュアルの内容として決定していく。その後、学校教員の意識変容・理解促進を目指したマニュアルを作成することに関しては、最終的なマニュアルの内容を決定し、四国地方・近畿地方を中心にマニュアルの配布や全国への Web 上での配信を行う。また、実際にマニュアルを使用した訓練プログラムを行い、その効果を検証する。効果検証の内容については、日本内外の学会で発表を行い、他の研究者や教育関係者からフィードバックを得る。

第二の目的であるアジア諸国での LGBTQ の現状について、韓国・台湾のセクシュアル・マイノリティの理解や支援の内容について研究のレビュー、心理援助者へのアンケートを通して明らかにする。その内容は、アメリカ心理学会（2015）で発表を行い、国際的な視点からのフィードバックをもらう。まず、各アジア諸国の LGBTQ 研究に関する専門家へのインタビューを行い、事例等について文化的意味・影響について分析開始する。その内容については、International Congress of Psychology(2016)にて発表を行う。その後、民共和国などの他の国々へその調査対象を拡大する。それぞれの国の文化的背景・歴史的背景・宗教的教えなども LGBTQ に影響を与えているので（Kasai & Rooney, 2012）、これまで調査した韓国・台湾・日本との比較を行い、研究論文としてまとめる。

#### 4. 研究成果

**平成27年度**には、第一の目的に関して、葛西・岡橋（2006）の作成したカウンセラー用のプログラムを教員用に改編したものを徳島県内の教員、高知県の教員を対象に実施した。その際に教員の意識・理解を測定するために、学校現場におけるセクシュアル・マイノリティの児童生徒への関わりについてのアンケートを実施した。その結果、2006年、2011年に同様のアンケートを行ったときよりも、学校現場で当事者がカミングアウトしている率が高く、教員の対応が求められていることが明らかとなった。

第二の目的であるアジア諸国での LGBTQ の現状については、アメリカ心理学会にて、韓国の現状、台湾の現状についての研究のレビュー、心理援助職の意識について情報交換をし、その一部を発表した。

**平成28年度**は、第一の目的に関して、栃木県、愛媛県、徳島県等においてセクシュアル・マイノリティへの支援に関するプログラムを実践し、その前後でアンケートを実施した。特に教員が持っている誤解について明確になるような教育プログラムを開発し、その実践を行った。効果的でない部分と効果的な側面について、その説明方法の分析を行った。対象は、一般教員、養護教諭、小・中・高等学校・大学の教員である。文部科学省からの性的少数者への配慮ある対応を求める通達が出されて以来、学校現場は知識の獲得を必要としており、教員の意識の向上が見られた。しかし、早急に対応しようとするあまり、性的指向の悩みを抱えている生徒に病院受診を勧めるといった誤った対応を行っている事例もあることが明らかとなった。

第二の目的に関して、台湾、香港において、セクシュアル・マイノリティについて研究

している者や当事者へのインタビューを行った。特に、台湾では、当事者の活動が活発であり、同性婚へ向けての運動等も活発であり、日本より発展していたが、研究、専門家の訓練に関しての研究はあまりなされていないこともあきらかとなった。香港についても同様に活動は活発であった。全国的な規模の研究結果もあり、当事者たちの苦痛や支援の必要な側面は類似していることがあきらかとなった。

**平成29年度**は、第一の目的に関して、高知県、香川県、徳島県等においてセクシュアル・マイノリティへの支援に関するプログラムを実践し、その前後でアンケートを実施した。また、教員に対するプログラムに基づいてハンドブックを教育委員会と共同で作成した。このハンドブックに基づいた研修を行った。また中学生や高校生対象にも性の多様性を理解するプログラムを考案し実施した。

第二の目的に関して、台湾で活動を行っている方へのインタビューを行い、その結果について分析を行った。また、アジア諸国だけでなく、ヨーロッパの国々にもセクシュアル・マイノリティに関する教育が進んでいる地域とあまり進んでいない地域があり、東ヨーロッパの研究者へのインタビューを行った。西ヨーロッパの国々と政策等も異なり、差別の現状が明らかとなったと同時に、教員の意識の違いについても明らかとなった。

**平成30年度**は、第一の目的に関して、徳島県教育委員会と連携して作成した「性の多様性を理解する - 教職員用ハンドブック - 」を使用して、県内外の幼小中高特別支援学校の教職員、児童生徒、保護者を対象に研修を行った。教職員、児童生徒への効果検証に関するアンケートを実施した。これらの研究の中で特に「マイノリティ共感」という概念が見出され、それを活用したプログラムの開発も行った。マイノリティ共感とは、多数派の人の中にも自分自身の中のマイノリティの部分に気づくことで、他のマイノリティの傷つきに敏感になり、共感性が生まれるというものである。また、プログラムの実施は、就学前教育においても必要であると考え、保育士や幼稚園教諭対象のプログラムを開発し、実践を行った。

第二の目的に関して、2019年から始まる台湾での同性婚に関する事前インタビューを行っているので、今後はその経過をみながら過程や事後インタビューを行う。

## 5. 主な発表論文等

### 【図書】(計4件)

葛西真記子(葛西真記子編),誠信書房,LGBTQ+の児童生徒学生への支援,2019,205

葛西真記子(水野治久,永井智,本田真大,飯田敏晴,木村真人編),金子書房,援助要請と被援助志向性の心理学(Column5 性的マイノリティへの援助:援助要請の視点から),2017,224(96-97)

葛西真記子(藤田哲也監修,水野治久・本田真大・串崎真志編著),ミネルヴァ書房,絶対に役立つ教育相談:学校現場の今に向き合う(トピックス セクシュアル・マイノ

リティの児童生徒の理解と支援), 2017, 202, (23-24)

Kasai, M. (Russell, T.S., & Horn, S. S. Eds.), Oxford University Press, Sexual Orientation, Gender Identity, and Schooling (Sexual and Gender Minorities and Bullying in Japan), 2017, 416 (185-193)

#### 【雑誌論文】(計5件)

葛西真記子, マイノリティ共感 (Inter-minority Empathy) - 「性の多様性を認める態度」に関連する要因—, 鳴門教育大学研究紀要, 第34巻, 2019, 136-141

葛西 真記子, 小渡 唯奈, 「性の多様性を認める態度」を促進する要因 - セクシュアルマジョリティへのインタビュー調査 - , 鳴門教育大学研究紀要, 第33巻, 2018, 50-59

葛西真記子, セクシュアル・マイノリティへの精神療法における倫理, 精神療法, 第44巻1号, 2018, 77-78

葛西 真記子, セクシュアル・マイノリティ当事者への支援の在り方, 心と社会 (日本精神衛生会), 査読有, 第48巻2号, 2017, 136-141

葛西真記子, セクシュアル・マイノリティの子どもを支えるスクールカウンセリング, 精神療法, 第42巻1号, 2016, 19-23

## 6. 研究組織

### (1) 研究協力者

研究協力者氏名: Keeyeon Bang

所属: Cyber University of Korea

研究協力者氏名: Hung Chiao

所属: Asia University

研究協力者氏名: Rooney, S. Craig

所属: University of Missouri)

研究協力者氏名: 岡橋陽子

ローマ字氏名: OKAHASHI Yoko

所属: 高知県スクールカウンセラー

研究協力者氏名: 伊藤瑠里子

ローマ字氏名: ITO Ruriko

所属: 愛媛県スクールカウンセラー